

特別支援教育（知的障害）

梶山雅司・久下あいり・横山由季・高阪英徳
笹倉美代・小野村晃太・高木由希・松下友紀

1 研究主題との関連について

（1）「教科等本来の魅力」について

令和3年1月4日の「新しい時代の特別支援教育在り方に関する有識者会議 報告」では、基本的な考え方として、「障害のある子供と障害のない子供が可能な限り共に教育を受けられる条件整備」と、「通常の学級、通級による指導、特別支援学級、特別支援学校といった、連続性のある多様な学びの場の一層の充実・整備」が示されている。すなわちインクルーシブ教育システムの推進と、障害のある子供の自立と社会参加を見据え、一人一人の教育的ニーズに的確に応える指導を提供できるようにすることが必要であるとしている。本校においても、インクルーシブ教育システムの推進と、一人一人の教育的ニーズに応える指導の提供は全教員で取り組むべき課題であると捉えている。

また同報告では、特別支援教育を担う教師の専門性の向上のための具体的な方向性についても示されている。全国的にも、小中学校で特別な支援を受ける子供の数が増加する中で、小中学校の特別支援学級を担当する教師の資質・能力の課題に取り組むことは重要であると考えられる。

昨年度は、研究主題を「教科等本来の魅力に迫るための教員の資質・能力」とした。知的障害教育においては、児童生徒の障害の特性を踏まえて、学習したことが生活の中に生きてくることを大切にしたい。菊地（2022）は知的障害のある子供が教育の対象とされていなかった時代から、先人たちが創意工夫し、切り拓いてきた知見の積み重ねにより現在の知的障害教育があると考えており、従前から生活に直結する教育を大切にしてきたという経緯を踏まえて、「知的障害教育は『子どもにはじまり子どもに帰る教育』であり、『実践にはじまり実践に帰る教育』である。さらには『生活にはじまり、生活に帰る教育』を大切に

してきた。」と述べている。本校特別支援学級（以下本学級）では、特別支援教育や知的障害教育が現在おかれている状況を踏まえ、「知的障害教育の魅力」を、日々の学習が日常生活の中で活用でき、身に付けた力を発揮して、生活していく力を育成していくことと捉えた。

知的障害教育の魅力

- ・生活力の育成

教員の資質能力

- ・授業構想力
- ・授業実践力
- ・授業分析・評価力

図1 教科等本来の魅力と教員の資質・能力の整理

（2）「教科等本来の魅力に迫るための教師の資質能力」について

次に「教科等本来の魅力に迫るための教員の資質能力」について、特別支援学校学習指導要領解説各教科等編（2018）にある「知的障害のある児童生徒の教育的対応の基本」（以下教育的対応の基本）に挙げられている10項目を、「授業構想力」「授業実践力」「授業分析・評価力」と関連づけて示したものが表1に示したものとなる。

表1 「知的障害教育の魅力に迫るための教師の資質能力」

授業構想力	目標設定	実態把握（知的障害の状態，生活年齢，学習状況や経験等）／適切な目標設定
	教材研究	生活との結びつきのある指導内容の設定 ／ 知識，技能，学びに向かう態度等の育成 ／ 意欲を育てる工夫
授業実践力		主体的活動を促す手立て ／ 課題解決に向けた思考力，判断力，表現力等を育む指導 ／ 成功経験を豊富にする手立てや形成的評価 ／ 教材・教具等の工夫 ／ 自己肯定感の育成 ／ 情緒の不安定さなどの課題への対応
授業分析・評価力		学習内容や目標の適切さについての学習評価 ／ 学習への意欲に対する見取りや分析 ／ 段階的な指導を行うための見取りや分析，授業改善

この「知的障害教育の魅力に迫るための教師の資質能力」について，授業づくりに焦点をあてて，具体的な教員の姿を整理し，提案をした。具体的な教員の姿としては，授業づくりの中で，授業構想力における項目の内容を具体的にしたり，授業実践の中で関連づけて具体的な姿を示めしたりすることができた。一方で，規定した3つの資質・能力について，それぞれの項目の内容を授業との関連の中で示しながらも，その内容の妥当性について，検討が必要となった。

3 今年度の研究取組

(1) 研究の目的

今年度の研究の目的は，引き続き「知的障害教育の魅力に迫るための教師の資質能力」の授業づくりに焦点をあて，「児童生徒が特別支援教育の魅力に迫ることができたか」「規定した資質能力は妥当であるか」の2点について検討する。その上で，逆向き授業設計論（主題説明参照）と関連づけて実施した，授業構想，授業実践における知見を得る。

(2) 研究の方法

3つの教師の資質・能力を踏まえた授業づくりを行う。その妥当性については，児童生徒が教科等本来の魅力に迫られたか否かについて，逆向き授業設計論をもとに分析をしていく。単元の目標（第1段階）で求められている姿を明確にし，承認できる証拠（第2段階）を示し，指導方法で示す手立て（第3段階）の手続きで検証していく。また，授業分析・評価段階においては，授業における学習の評価と，単元以外の場面で，学習したことが反映されている場面を捉える。

(3) 教科等本来の魅力と逆向き設計論との関連

今年度も，本校の研究テーマを「教科等本来の魅力に迫る教師の資質能力」として研究を進めるが，知的障害教育の実践において，児童生徒が個々のもつ力を発揮しつつ，その子なりの自立と社会参加ができることを願って，日々の教育実践を行っている。そのため，意味のある学習にするために，児童生徒の実態を出発点として学習を構想し，実践している。このように考えると逆向き授業設計論における授業づくりはこれまでの取り組みと重なる点がある。例えば，授業構想段階の第1段階における「求められる結果の明確化」し，第2段階における「承認できる証拠を決定」していくことは，通常学級においても本学級においても変わらない。ただし，同じ教室で同じ教材を扱って授業をしても，個々の学習課題は異なる。それゆえに，指導案には，本時の目標に照らし合わせて，一人一人の目標を示してきた。

本研究においては，知的障害教育の魅力として「生活力の育成」をキーワードに研究を進めていくが，教科別の指導においても，各教科等を合わせた指導においても，学習や活動の中で身に付けたい資質・能力は，それぞれの学習の中で評価していくことが重要となる。一方で，児童生徒の特性によ

っては、学習したことが他の場面でいかされないことや、一度の学習に留まらず繰り返しの中で定着をしていくことが考えられる。このように考えると、単元内の評価をしながらも、例えば授業以外の学校生活場面や家庭生活場面も含めて、児童生徒の姿を捉えていく必要がある。

以上のことから、特別支援教育の魅力に迫れたかどうかについては、単元内における学習の評価と授業以外の場面における児童生徒の姿を捉えていく。その上で、教師の3つ資質能力を具体的に示し、その手立てが有効であったか、検証していく。

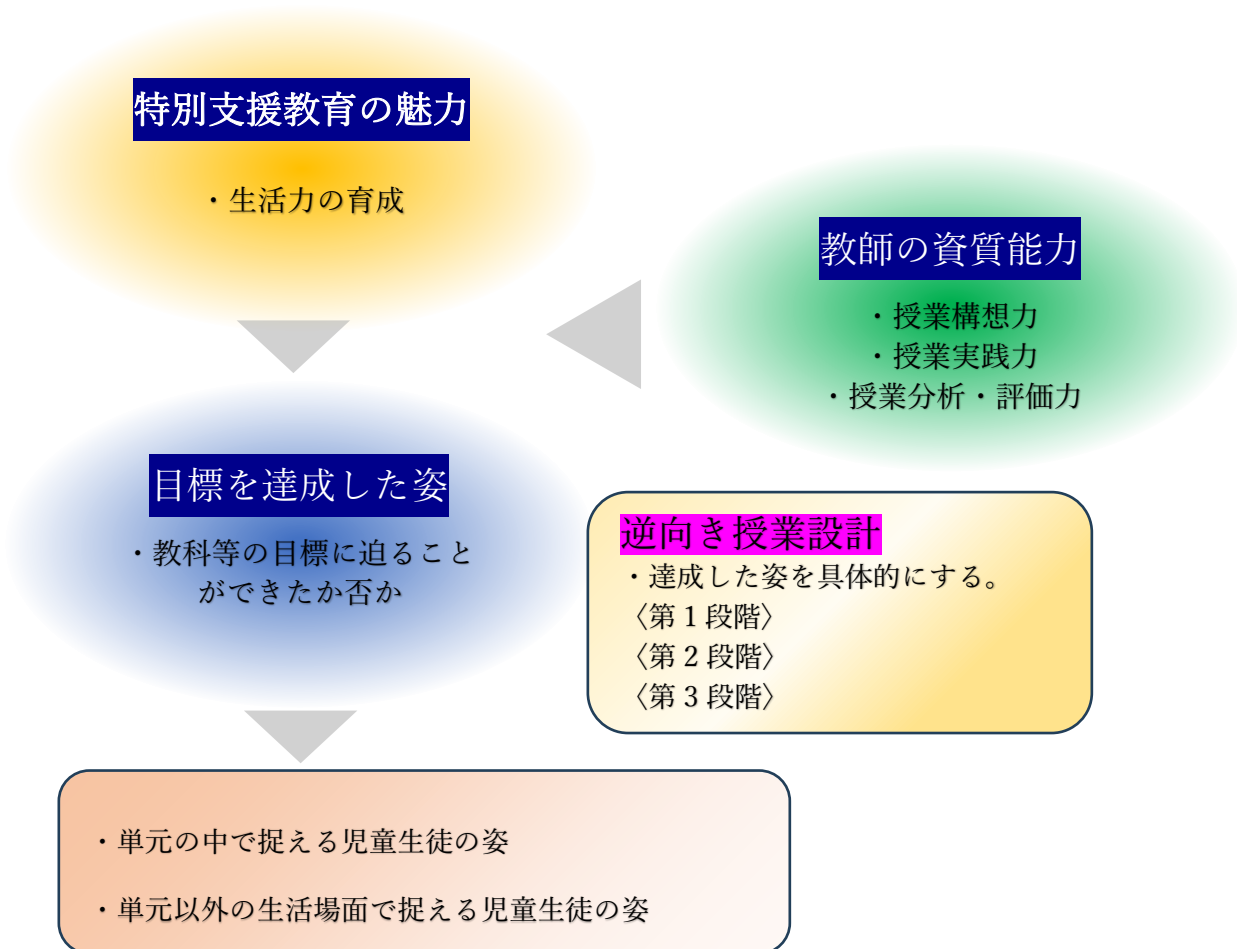


図2 逆向き授業設計における授業づくりのイメージ

【引用・参考文献】

文部科学省 (2021) 「新しい時代の特別支援教育在り方に関する有識者会議 報告」

菊地一文 (2022) 「知的障害教育の魅力と課題を踏まえ、今後の充実に向けて求められていること」 特別支援教育研究, 775

文部科学省 (2018) 「特別支援学校学習指導要領解説各教科等編 (小学部・中学部)」